

原著

複合マイノリティとインターセクショナルリティ

— ドイツにおける文化の多様性に関する国際学会参加と インクルーシブモスク訪問からの考察 —

白石 雅紀¹⁾・戸田 有一²⁾

Multiple Minority Identities and Intersectionality: Reflections from an International Conference on Cultural Diversity and Inclusive Mosque Visits in Germany

Masanori Shiraishi¹⁾ and Yuichi Toda²⁾

要 約

本論考は、2023年夏のドイツでの国際学会参加とIbn Rushd - Goethe Moschee訪問の際の筆者2名の学びをもとに、インターセクショナルリティという概念を用いての複合マイノリティをめぐる現状理解とその課題を論じることが目的である。まず、インターセクショナルリティの概念について述べたのち、筆者らが「マイノリティの複合」や「インターセクショナル（交差性）の視点」に着目して研究を行ってきた経緯や、国際学会とインクルーシブモスク訪問で得た学びの整理を行う。結びとして、従来の単次元分類（One-dimensional categorizing）による理解の仕方（主に二分法）と、現在求められているインターセクショナル（交差性）の視点を用いた多次元分類（Multi-dimensional categorizing）による理解の仕方について考察した。

キーワード：複合マイノリティ、インターセクショナルリティ、マイノリティ集団間の相克関係（Inter-minority Conflict : IMC）、多次元分類（Multi-dimensional categorizing）

1. はじめに

本論考は、2023年夏のドイツでの国際学会参加とインクルーシブなモスクであるIbn Rushd - Goethe Moschee（以下Ibnモスク）訪問の際の筆者2名の学びをもとに、インターセクショナルリティという概念を用いての複合マイノリティをめぐる現状理解と課題を論じることが目的とする。まず、背景にある今までの筆者らの問題意識を述べた後、国際学会参加

とIbnモスク訪問で得た学びを整理する。その後、従来の単次元分類（One-dimensional categorizing）による理解の仕方（主に二分法）と、インターセクショナル（交差性）の視点を用いた多次元分類（Multi-dimensional categorizing）による理解の仕方について考える。

1) 白石 雅紀 東京未来大学子ども心理学部准教授（Tokyo Mirai University）

2) 戸田 有一 大阪教育大学教育学部教授（Osaka Kyoiku University）

セクショナリティという概念を用いて研究が行われ始めている。例えば、「交差性 (intersectionality) という分析視角」(鄭 2023:50) から在日コリアンの現状を捉えなおした研究^vや、交錯^{vi}を軸に据えて多角的に日本における多文化社会を分析した河合らの研究^{vii}などが、その嚆矢である。

筆者兩名は、近年、「インターセクショナル (交差性) の視点」からの「マイノリティの複合」に着目して論じてきた。きっかけは、常磐会短期大学のト田真一郎教授らの研究グループが中心となって日本保育学会や日本乳幼児教育学会などで継続してきた「多文化共生保育」にかかわる自主シンポジウムでの議論である。議論を重ねる中で、イスラームと SOGI マイノリティ^{viii} など、互いに相容れない、相克関係になりがちなマイノリティ集団間のあることが浮かび上がってきた。

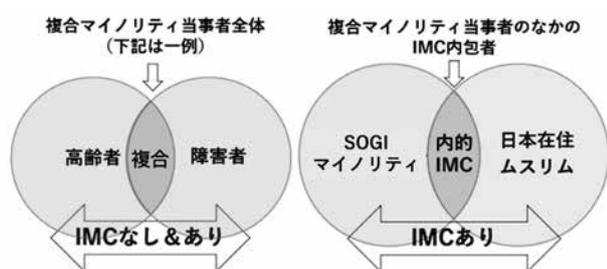


図3 「複合マイノリティ当事者」と「IMC内包者」

日本においては、これまで障害者、高齢者、SOGI マイノリティ、日本在住のムスリムなどのマイノリティ集団ごとに議論がなされてきた(白石・戸田 2022:35)。しかし、「障害者である高齢者」のように、個人内に複数のマイノリティ性が重なる「マイノリティの複合」があり得る(図3左のベン図)。Crenshaw (1989) がアメリカの「黒人・女性」を例に論じた通り、複合マイノリティは単次元の差異のみで理解してしまってもいけない。

さらに「非イスラーム世界に暮らす同性婚に否定的なムスリムたち」と「同性婚を望む同性愛者たち」の間に見られる相克のような「マイノリティ集団間の相克関係: Inter-minority Conflict (以下、「IMC」

と表記)」という事象もある(白石・戸田 2022:35)。集団間の相克のなかにある複合マイノリティ当事者の中には、たとえば「日本在住のSOGIマイノリティであるムスリム」など、マイノリティ相克を個人内に内包した複合マイノリティ当事者(以下、「IMC内包者」と表記)が存在する(図3右のベン図)。

この問題意識をもとに、筆者らはムスリム SOGI マイノリティに着目して「複合マイノリティ」の諸課題の検討を行った論考(白石・酒井・戸田 2021)や、「マイノリティ集団間の相克関係 (IMC)」に着目した論考(白石・戸田 2022; Shiraiishi & Toda 2023)を発表してきた。社会運動を源流とするインターセクショナリティという用語は、その経緯から社会運動との連動を含む概念であるが、筆者らがインターセクショナリティに着目した経緯は、インターセクショナル (交差性) の視点から「保育現場における多文化共生の課題をよりよく理解するため」である。よって筆者らはインターセクショナリティを「自分自身や周りの人々が直面している問題を解決するための分析ツール」(Collins & Bilge 2020:2) としてよりも、インターセクショナリティに内包されるインターセクショナル (交差性) の視点に焦点を置き「自分自身や周りの人々が直面している問題をよりよく理解するための分析ツール」として今のところは用いている。共生社会の実現に向けて、単次元の差異のみで二分法的に理解されやすい複合マイノリティを多角的に理解するためには、インターセクショナル (交差性) の視点は欠かせないと考えているためである。

学びの中心であるインターセクショナル (交差性) の視点は、日本でも、急増する外国人との共生のために重要である。「自国人と外国人」のような二分法で理解してしまうと、結果として分断の拡大を引き起こす恐れがある。分断の『再生産』または『固定化』が継続してきたのは『日本人』と『外国人』とを単純化する二分法である(下地 2019:183) との指摘もある。

これまで筆者らは、複合マイノリティやIMCと

いった観点から共生社会における多様性尊重の難しさを整理してきたが、その一方で、IMC内包者の経験への着目や、「マイノリティ共感」(葛西 2018) など、共生社会の実現に向けて、つながりを「織りなす^{ix}」ための方向性や方法論を模索する論考をまとめてきた。

上記のような問題意識のもとで、国際学会での発表とIbnモスク訪問を目的に、2023年夏、筆者両名はドイツを訪問することとした。アメリカ発の概念であるインターセクショナルリティが2023年のドイツではどのような位置づけを得ているのか、筆者らの問題意識と通じる研究や実践が行われているのかどうかを考察するために、まず、ドイツで開催された国際学会での議論をまとめる。次に、SOGIマイノリティとムスリムという、ドイツにおいても複合・相克するマイノリティに深くかかわるモスクを訪問した際の聴き取りの概略を紹介する。そのうえで、インターセクショナルリティという概念を用いての現状理解と課題を論じる。

3. 文化の多様性に関する学会参加での出会いと学び

この節では、筆者両名が参加した4th Cultural Diversity, Migration, and Education Conference (4thCDME) での出会いと学びを概説する。

Cultural Diversity, Migration, and Education Conference (文化的多様性・移民と教育学会) は「理論的観点、実証的研究、および制度・政策面から、文化的に多様化する社会において、若者の教育効果をどう最大化するかについて議論すること(筆者訳^x)」を目的として、2016年より始まった。2018年の第2回、2021年の第3回まで、いずれもドイツのポツダム大学で行われ、今回の第4回はドイツのハレにあるマルティン・ルター大学において、2023年8月21日から23日までの日程で、対面とオンラインを併用して行われた。

文化の多様性をテーマとした国際学会であったが、筆者両名が見て回った範囲において、インターセクショナルリティを前面に打ち出して行われた発表

は、筆者両名の発表を除いて、なかったようである^{xi}。ただ、筆者らの問題意識に通じる学びを得ることができた。本節では①多次元的多様性 (Multi-dimensional diversity) の視点、②移民の背景を持つ人をどのように理解するのか、③筆者両名によるIMCの発表を通じての3点から、インターセクショナルリティに通じる学びを整理する。

① 多次元的多様性 (Multi-dimensional diversity) の視点

4thCDMEにおける主要なシンポジウムの一つであった「When is Classroom (Ethnic) Diversity Beneficial for Whom and Why?」(学級(民族)の多様性は、誰にとって、なぜ有益なのか?)^{xii}の発表内容と論点より、インターセクショナルリティに通じる箇所を取りまとめる。その際、シンポジウムの内容を要約するにあたり、発表資料をもとに再構成を行った。

【民族の多様性】西ヨーロッパで近年、民族の多様性が以前より増している。特に18歳以下の若年層、学校内での民族の多様性が増している現状がある。今日の生徒は、以前の世代よりも多様化した学習環境に適応する必要がある。このため、近年では民族の多様性が生徒の幸福や学業達成に及ぼす影響に関心が高まっている。一方で、民族の多様性は、集団間の緊張、民族間の分断(隔離)、社会的孤立を招き、学業成績に悪影響を及ぼす可能性がある。しかし、民族の多様性は、社会性と情緒的能力、そして他の世界観に対する寛容さを促進する、他の文化と関わる可能性を秘めている。従って主な問題は、民族の多様性が良いか悪いかではなく、民族の多様性を最大限に活用する方法を模索することである。

【現状での課題】現状での課題として挙げられているのは、①フライト現象(移民が一定以上増えると、元の住民が引っ越す現象)により、学校内における民族の多様性が増しているとは言え、地域によるばらつきがあること。②単一次元の分類(たとえば「自国人と移民」のような二分法)の視点で捉えてしまうと、結果として分断の拡大を引き起こす恐れがあること、である。特に②については、移民の背景

(Immigrant Background) をもつ生徒を理解するために、多次元的多様性 (Multi-dimensional diversity) の視点が必要である。実際に移民の背景を持つ生徒の特性は、単一次元ではなく、複数の特性を同時に持っていることも多い。教室においても、異なる特性が重なり合っていることを意識し、統合 (consolidation) へと繋げることが重要であると示されていた。

【多様性のメリットとデメリット】 難民の生徒は、エスニック・マイノリティの生徒が多い教室では、拒絶される頻度も低く、より適合する。エスニック・マイノリティの生徒はエスニック・マジョリティの生徒と比べて、難民の生徒に対して好感を抱きやすく、難民の生徒と友達になる割合が高い。その一方で、難民の子どもがエスニック・マイノリティの多い学校に入ること、多数派の言語の習得に及ぼす影響、社会の分断の拡大、エスニック・マジョリティ集団との良い接触 (関係) を体験する機会を逃す、などの課題もある。

エスニック・マイノリティの生徒は教室における民族の多様性が高いほど、ポジティブな影響を受ける。一方、民族の多様性の低い教室は、マイノリティの生徒にとって被害を受けるリスクが増す。エスニック・マイノリティの生徒にとって、教室内における民族の多様性の度合いが高いことと、教師からのサポートの両方が、教室内における被害に対する保護資源である。また、民族の多様性の緩衝効果は、エスニック・マイノリティの生徒に対してのみ認められる。

【教師の支援】 エスニック・マジョリティの生徒への影響は、民族の多様性が「中程度」から「高い」教室、その中でも特に教師の支援が「低い」場合は被害が多くなる。その際、民族の多様性の度合いが「中程度」から「高い」場合、エスニック・マジョリティの生徒に対する教師のサポートは被害に遭うリスクを最小化できることが示唆されている。

エスニック・マイノリティの生徒の場合、教師の支援は教室の民族の多様性のどのレベルにおいても、被害者の減少に関連していたが、特に被害を経

験する可能性がもっとも高い民族の多様性の低い教室において、被害者の減少に関連していた。これらの知見は、エスニック・マジョリティの生徒とエスニック・マイノリティの生徒の双方にとって、教師が教室における民族の多様性と集団間関係の調整において重要な役割を果たしていることを示している。民族の多様性に対処するための教師の準備に投資する必要性も明確に示している。教師の行動をより詳細に調査した研究によれば、民族の多様性に対処するために、教師はしばしば、差異を尊重する代わりに類似性を強調するようなアプローチを好む。しかし、このような表面的な形態の多文化教育は、偏見を減らすどころかむしろ増加させることによって、益よりも害をもたらす可能性がある。

ポジティブな教師・生徒の関係は、生徒間の人間関係に良い影響を与える場合もある^{xiii}。また、教師と生徒のポジティブな関係は差別経験の悪影響を緩和する。重要なことは、民族の多様性をもたらす潜在的な悪影響を教師がカバーすることが出来るという点である。また、学校と教師は、民族の多様性の低い教室にいる難民の生徒に特別な注意を払い、支援を提供する必要がある。

② 移民の背景を持つ人をどのように理解するのか

国際学会前日に行われたワークショップ (Quantitative Methods: 講師 Dr. Sauro Civitillo & Prof. Philipp Jugert) の主題は「移民の背景を持つ人をどのように理解するのか」でありインターセクショナル (交差性) の視点に通じるものである。その視点での移民研究における量的データの取り方についてワークショップ資料と当日の議論をもとにまとめる。

これまでの移民研究において量的調査を行う場合、移民の背景 (Immigrant Background) を持つ人を対象に行ってきた。移民の背景の定義 (EU Migration and Home Affairs 2010) は次のとおりである。

移民の背景を持つ人物：

1. 現住国の国外で生まれた人、および／または
2. 少なくとも親の一方が移民として現住国に入

国した人、および／または

3. 現住国とは異なる国の国籍を以前保持していた人

本ワークショップでは、移民の背景を持つ人に対しての量的調査で、上記の定義を用いて調査対象者を抽出するのはもはや有効ではないことが議論となった。例えば、ドイツ国内を例にとると、〈両親ともにドイツ人であるが、本人は両親がフランス滞在中に生まれた〉場合や、〈母親がドイツ語を話すオーストリア人だが、本人はドイツで生まれ、両親のもとで育った〉場合など、本人のアイデンティティや生活習慣は一般的なドイツ人であっても、上記の移民の背景定義によると、〈移民の背景をもつ人物〉と理解される。その結果、量的調査において、例えば「ドイツで暮らすうえで特に不都合などはありますか」などの設問に対して「特にない」と回答するなど、本来想定している移民の背景を持つ人の課題が理解されにくくなる恐れがある。その一方で、両親ともにドイツ生まれであり、自身も生まれた時からドイツで暮らしているが、本人のアイデンティティがトルコにある場合、本来想定している移民の背景を持つ人であるにもかかわらず、上記の定義には当てはまらないため、調査対象から漏れてしまう恐れがある。ワークショップでは、ここまで多様化が進んだ現在社会において、従来の「移民の背景」の定義をそのまま移民研究の量的調査で用いることは不適切であるとする一方、多様性を無視して、非差別化の原則（Non-differentiation principle）を適用することには明確に「NO」としていた。

上記の議論より、「移民」を把握するためには「移民」を「他郷または他国に移って住むこと。また、その人。現在では、移住あるいは移住者という」という字義的な単次元分類（One-dimensional categorizing）で理解してしまうと、実際の姿を見誤ってしまう恐れがあることが示唆された。移民や移民の背景を持つ人々をより深く理解する上で、インターセクショナル（交差性）の視点を用いた多次元分類（Multi-dimensional categorizing）による理解の仕方は必要

であると思われる。

③ IMC（マイノリティ集団間の相克関係）の発表を通じて

筆者両名はIMCに関する内容を口頭発表にて行った。口頭発表の最後、フロアに対して、「皆様の周りのIMCはどのようなものがありますか」と問いかけたところ、明確な返答はなかった。その一方、その後のセッション内の発表の中で、チェコからの発表者より、チェコに避難しているウクライナ難民の中でも、〈ロシア語を話すウクライナ人〉と〈ウクライナ語を話すウクライナ人〉の間にはコンフリクトがあるし、また、もともとチェコにおいて差別されてきたロマ人が、ウクライナ難民を差別しているといった報告があった。

口頭発表を通じて、IMCは事象としてはあるが、IMCに類する用語がないため、このテーマの議論は発展途上であること、また多文化に関する既存の研究は多文化という枠組み内でのみ行われている場合が多く、インターセクショナルリティの視点でのより幅広い議論が必要であることが感じられた。

4. インクルーシブモスク訪問での出会いと学び

ドイツを訪問するにあたり、ドイツ国内においてIMCにかかわる活動を行っている、当事者・組織/団体を調べた結果、ベルリンにあるIbnモスクが浮かび上がった。IbnモスクはIMCをはらみがちな「イスラーム」と「SOGIマイノリティ」のマイノリティ性を包含している団体である。訪問日時は2023年8月20日であり、筆者両名に加え、通訳兼現地のコーディネーターとしてライプツィヒ在住のヘンケル敦子さん、ライプツィヒ市内のKITA（日本の認定こども園に相当）に勤務し、自身もドイツ国籍を持つクルド系トルコ人のIslim Ince先生も含む、計4人で訪問した。Ince先生には、今回の訪問において筆者両名とIbnモスクをつなぐ橋渡しの役割を担っていただくため、同行をお願いした。

【Ibnモスクの歴史と特色】Ibnモスクは、クルド系トルコ移民で弁護士でもあるセイラン・アテシュガバ

ルリンに設立した当初から、女性やSOGIマイノリティを含む、すべての人に開かれているインクルーシブモスクである。特にイスラームにおいてSOGIマイノリティはタブー視されることも多く、SOGIマイノリティも含めすべての人に開かれているインクルーシブモスクは、ドイツでは現在はIbnモスクのみである。Ibnモスクの名前の由来は、イブン・ルシュド(イスラーム世界にアラビア語に翻訳されて伝わっていたギリシャの古典をアラビア語から再翻訳し、西洋社会に伝えるなどの活動を通じて、西洋とイスラームの架け橋になった方)と、ドイツの作家ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテである。通常、モスクでは男性と女性の礼拝場所を分けるが、Ibnモスクでは女性も男性と同じ場所で礼拝を行う。イスラームの礼拝日である金曜日は他の曜日よりも多くのムスリムが礼拝に訪れる。そのため、他の多くのモスクでは女性の立ち入りを禁止し、通常女性が礼拝を行うスペースを男性に開放することで対応している。しかし、Ibnモスクでは元々男性と女性が一緒に礼拝を行っており、女性でも金曜日に礼拝を行う機会が確保されている。

礼拝の仕方(具体的には礼拝にかかる時間)にはスンニ派とシーア派で多少の違いがある。以前は各自が自由に礼拝を行っていたが、先に礼拝を終えて場所を離れると、まだ礼拝中の人にとっては気分が良くないという声があった。そのため、現在では礼拝の終わりの時間を宗派問わずに合わせるようにしている。このようにIbnモスクでは、様々な人がいる中で、無理のない範囲であれば互いに歩み寄ることを大切にしている。

Ibnモスクではイスラームとして同性同士の結婚の儀式を行う場を提供しており、離婚の儀式も行っている。通常、イスラームでは離婚は男性側からのみ行えるが、Ibnモスクでは女性からでも離婚ができる場を提供している。モスク内や礼拝時の服装は、女性も男性も自由であり、女性はスカーフを被るか被らないかを自分で選ぶことができる。

Ibnモスクは、多くのムスリムがクルアーンをあまり

読んでいないことを懸念している。多くのムスリムは、自分の家族が行っている規範をイスラームの規範だと思っているが、それがクルアーンに記述された規範とは限らない。そのため、Ibnモスクではクルアーンをしっかりと読んで自分で考えることを奨励している。

ムスリムの中には、クルアーンを神聖な聖典として、容易に触れてはいけないと考える人もいる。触れる場合でも、手を洗ってから読むべきだという考え方もある。しかし、Ibnモスクではクルアーンを神聖視しすぎず、実際に読んで考える聖典と捉えている。家族の規範が間違っていた場合の例として、Ibnモスクが関わったインド出身のムスリムの事例がある。その人は村でイスラームの規範に違反したとされ、村に住めなくなったが、実際にはその行為はイスラームとして問題はなかった。

【Ibnモスクと地域社会との関係】 ベルリンには90以上のモスクがあるが、Ibnモスクとベルリンの他のモスクはあまり仲良くできていない。Ibnモスクは誰に対しても開かれているモスクでありたいという理念で運営しているが、他のモスクは必ずしもそうではないようだ。Ibnモスクの説明によれば、「イスラームでは妥協することが難しい人たちが多い」とのことだ。

IbnモスクはネットやSNSを通じて活動を可視化しており、そのため世界中からヘイトメッセージが届くこともある。しかし、Ibnモスクはまず対話を重視し、Ibnモスクの在り方に反対する人たちとも向き合おうとしている。また、啓蒙活動として学校などでワークショップを行っている。

現在のベルリン市長(2023年当時)は、市長になる前からIbnモスクの活動に理解を示している支援者の一人である。また、Ibnモスクの活動を支援するキリスト教会もある。現在のIbnモスクの施設や、移転前のIbnモスクの施設も、そのキリスト教会の好意で場所を確保できたそうである。なお、Ibnモスクの活動を支援してくれるキリスト教会の牧師はSOGIマイノリティ当事者であるそうだ。

IbnモスクはベルリンのゲイグループやアライアンスといったSOGIマイノリティのグループともつなが

りがある。ただし、ゲイの中にはイスラームや移民を嫌う当事者もいるため、そういった人たちとはうまくいっていないという側面もある。

【まとめとIMC内包者】 以上のような様々な課題はあるが、全体としてIbnモスクを取り巻く環境は、活動開始当初よりも社会や地域住民の理解が進み、より活動しやすくなっている。その一方で、Ibnモスクに対してはイスラーム圏を含むドイツ国内外からの脅迫が続いている現状もあり、今後に向けて、社会全体でさらなるtolerance(寛容)が求められるとしている。

今回の訪問を通じて、Ibnモスクの活動によってムスリムでありSOGIマイノリティでもある自分を受け入れることができたトルコ系ドイツ人のIMC内包者にもつながることができた。その方は、もともとムスリムであったが、SOGIマイノリティである自分を自覚しだした一時期、イスラームから離れたことがあったそうである。ただ、Ibnモスクの活動に触れ、ムスリムのSOGIマイノリティである自分を受け入れることができたそうである。

上記のような訪問時の聴き取りから考えるに、Ibnモスクの活動はインターセクショナルリティへの対応を体現しているといっても過言ではない。インターセクショナルリティを前提とした諸活動は、「イスラーム」と「SOGIマイノリティ」のIMC内包者のように、社会の中で居場所を見つけにくい人々に対し、エンパワメントを行う機能がある。その一方で「イスラーム」と「SOGIマイノリティ」のようにIMCに陥りやすい側面を併せ持つ中で活動することは、いまだに攻撃にさらされるなどの困難を伴っている。

5. むすび

2024年1月1日現在、日本人人口は前年比で86万人減少した一方、外国人人口は、一時減少したコロナ禍時以前の水準に戻るばかりか、前年比32万人増で過去最多の332万人となっている^{xiv}。外国人人口の増加に伴い、日本社会の多様性はより一層進展していき、共生社会の実現が日本社会におけるさらに重要な課題となることは明らかである。そのなか

で、今回の国際学会参加とIbnモスク訪問を通じて、今後の筆者らの研究の方向性の模索や、日本社会の課題解決に資する多くの学びを得ることができた。

日本社会の多文化共生をめぐる課題の一例として、例えば、外国にルーツのある子どもへの支援が不十分である点が挙げられる。毎日新聞取材班が2020年にとりまとめた『にほんでいきる：外国からきた子どもたち』で描いている通り、外国からきた子どもたちは無支援状態におかれることが多く、不就業・不就業につながる事例が多数ある。「今も日本のあちこちで、外国から来た子どもたちが苦悩を抱え込んでいる。しかも周囲の大人たちには、その存在が見えていない」(毎日新聞取材班 2020:266)とあるように、日本で暮らす外国から来た子どもは二分法で理解されやすい存在である。「外国にルーツのある子ども」を理解する上で、まずは教師自身がインターセクショナル(交差性)の視点をもつことの重要性が、今回参加した国際学会でも議論されていた。

改めて今回の議論を整理する。例えば「外国にルーツのある子ども」を「自国人と外国人」のような二分法で理解するのでは、不十分である。実際に「外国にルーツのある子ども」は図2を例にとると「外国」「子ども」「貧困」「低学歴」「移民」「障がい」「非異性愛」「トランスジェンダー・ノンバイナリー」「濃い肌色」など、様々な抑圧の多次元的な交差の中にあることも想定でき、結果として個別最適な支援につながっていない可能性がある。「日本か外国か」といった単次元分類(One-dimensional categorizing)での二分法ではなく、インターセクショナル(交差性)の視点を用いての多次元分類(Multi-dimensional categorizing)で「外国にルーツのある子ども」を理解する必要がある。それができていないことが、「今も日本のあちこちで、外国から来た子どもたちが苦悩を抱え込んでいる」現状につながっていると想定できる。

この現状を改善するため、インターセクショナル(交差性)の視点から、日本の複合マイノリティ当事者に焦点をあてたさらなる研究が求められる。このような問題意識から、筆者らは複合マイノリティ当

事者や、IMC内包者の経験に焦点をあて、研究をすすめている。

IMCを乗り越える試みは、Ibnモスク訪問での聴き取りによれば、反対派からの誹謗中傷を受けるなど、いまだ困難な状況であることがうかがえる。そのような状況にあっては、IMCを内面にもつ内包者は、特に声を上げにくい存在であると想定できる。だからこそ、Ibnモスクの活動のように、インターセクショナルリティとその課題をふまえた活動は、IMC内包者のように、社会の中で様々な課題を抱え、一人で悩んでいる方々のエンパワーメントにつながる可能性がある。日本国内でこのような活動をしている団体を見つけるのは難しいかもしれないが、筆者

らは引き続き、この研究課題に取り組んでいく。

今回の国際学会では、大学院生や講師など、比較的年齢の若い研究者が大半であった。その一方、教授職にある重鎮の姿はゲストスピーカー以外にはあまり見受けられなく、移民や多様性といった研究テーマはドイツにおいても比較的新しい研究テーマであることがうかがえた。中堅から若手の研究者が今後、この研究分野を牽引していくことが予測されるが、筆者らも引き続き、この流れに加わり、研究を進展させていきたい。



図4 発表時の様子



図5 国際学会の会場大学



図6 Ibnモスクにあったポスターのひとつ(ユダヤ・キリスト・イスラームの共生がシンボルマークで強調されている)



図7 多様性を表しているIbnモスクのオブジェ(正面)^{xv}



図8 多様性を表しているIbnモスクのオブジェ
(正面左側から)



図9 多様性を表しているIbnモスクのオブジェ
(正面右側から)

引用文献

- Collins, P., & Bilge, S. (2020). *Intersectionality*. Polity Press. (=2021,小原理乃訳,下地ローレンス吉孝監訳『インターセクショナリティ』人文書院.)
- Crenshaw, K. (1989). Demarginalizing the intersection of race and sex: A black feminist critique of antidiscrimination doctrine, feminist theory and antiracist politics. *University of Chicago Legal Forum*, volume 1989, 139-168.
- Henriques, A., Rafael, S., Almeida, V., & Pinto, J. (2023). The problem with gender-blind design and how we might begin to address it: A model for intersectional feminist ethical deliberation. *CHI EA '23: Extended Abstracts of the 2023 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems*. Article No. 423, 1-12. <https://doi.org/10.1145/3544549.3582750>.
- 葛西真記子 (2019) 「マイノリティ共感 (Inter-minority Empathy) - 『性の多様性を認める態度』に関連する要因」『鳴門教育大学研究紀要』34, 136-141.
- 河合優子編 (2016) 『交錯する多文化社会:異文化コミュニケーションを捉え直す』ナカニシヤ出版.
- 清水晶子 (2024) 「10安心をもたらさないインターセクショナリティへー共生に向けた小さな覚書」土屋和代・井坂理穂編『インターセクショナリティ』東京大学出版会, 171-182.
- 下地ローレンス吉考 (2019) 「『日本人』と『外国人』の二分法を今改めて問い直す」『現代思想』04 2019, vol.47-1, 177-186.

- 白石雅紀・酒井美里・戸田有一 (2021) 「複合マイノリティに関する諸課題の検討—ムスリムSOGIマイノリティ—」『東京未来大学研究紀要』15, 79-92.
- 白石雅紀・戸田有一 (2022) 「日本におけるマイノリティ集団間の相克とその超克の方向性—マイノリティ共感などによる多様性の織りなし—」『未来の保育と教育—東京未来大学保育・教職センター紀要—』9, 35-50.
- 鄭康烈 (2023) 『新自由主義の時代の在日コリアン: オールドカマー移民の分極化と交差性』青弓社.
- 土屋和代 (2024) 「序『インターセクショナリティ』に何ができるのか」土屋和代・井坂理穂編『インターセクショナリティ』東京大学出版会, 9-21.
- 毎日新聞取材班編 (2020) 『にほんでいきる: 外国からきた子どもたち』明石書店.
- i 本図はKatheryn Pauly Morganが1996年に作成した図をもとに、Henriquesらが修正を加えた図 (Henriques, et al. 2023) である。Morgan, K. (1996). Describing the Emperor's New Clothes: Three Myths of Education (In-)Equality. In Diller, A.(Eds.) *The Gender Question in Education – Theory, Pedagogy & Politics* (pp.105-123). Routledge.
- ii 本図はMorganが1996年に作成した図をもとにAkira YLが日本語に翻訳、修正を加えた図である。(Akira YL - 投稿者自身による著作物, CC 表示-継承 4.0.) <a href="//commons.wikimedia.org/w/index.php?title=User:Akira_YL&action=edit&redlink=1" class="new" title="User:Akira YL (page does not

- exist)">Akira YL - 投稿者自身による著作物, CC表示-継承 4.0, リンクによる (2024年9月7日閲覧)
- iii 本稿においてマイノリティとはある社会で暮らすマジョリティと同等の社会生活を営む上で、合理的な・配慮・支援を必要とする人々 (白石・酒井・戸田 2021) とし、マイノリティ性とはその立場にたたせやすい特性とする。
- iv 例えば「社会問題の特徴を認識し名づけることにおいてインターセクショナルリティがいかに用いられてきたのか、そして社会的不正義へのインターセクショナルな対応がいかにアクティビズムを活性化させるのか」(Collins & Blige 2020:20) など
- v 鄭康烈 (2023) 「新自由主義の時代の在日コリアン」青弓社
- vi 河合は著書で交錯について次の通り述べている「『交錯』という視点は、英語圏において「交差 intersectionality」として蓄積されてきた議論に基づくものである」(河合 2016:3)
- vii 河合優子編 (2016) 「交錯する多文化社会：異文化コミュニケーションを捉えなおす」ナカニシヤ出版
- viii 「SOGIマイノリティ」とは、①性的指向 (Sexual Orientation)、②性自認・性同一性 (Gender Identity) に加え、③性別表現 (Gender Expression)、④生まれついた身体の性 (Sex Orientation もしくは Sex Characteristics) をも含めた4つの性の要素に基づいて、今まで一般的とされてきた男性像や女性像から外れる故に生きづらさを感じている人々と定義する。(白石・酒井・戸田 2021:84)
- ix つながり「織りなす」と表したのは、集団間の相克が決定的な断絶や深刻な対立にならないための、各集団の共存が可能になるための「多様な」試みが相互に補完しあい、各マイノリティ集団間のつながりを全体的に織りなしていく未来像をイメージしているためである (白石・戸田 2022:41)
- x 原文は次の通り。Our aim with this conference is to highlight theoretical perspectives, empirical contributions, and policy implications addressing how best to promote young people's educational success in increasingly culturally diverse societies.
- xi 学会プログラムや発表抄録を参照しても発表において intersectional もしくは intersectionality という用語は筆者らしか使用していない。
- xii 演題：学級 (民族) の多様性は、だれにとってなぜ有益なのか？
シンポジウム日時：8月23日 10:20-11:35
会場：マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク HS2教室
司会：Prof Philipp Jugert (University of Duisberg-Essen) & Aileen Edele (University of Duisberg-Essen)
指定討論者：Prof Metin Ozdemir (Orebro University)
話題提供：
1.Does ethnic diversity foster the social integration of refugee students? Findings from nationally representative social-network data from Germany
Zsofia Boda (University of Essex), J Georg Lorenz (University of Potsdam; Leipzig University), J Marte Jansen (Humboldt-University Berlin; Centre for International Student Assessment), Petra Stanat (Humboldt-University Berlin; Berlin Institute for Integration and Migration Research), Aileen Edele (Humboldt-University Berlin; Berlin Institute for Integration and Migration Research)
2.Classroom ethnic diversity, teacher support and peer victimization: Evidence from four European countries
Olivia Spiegler (Nuffield College, University of Oxford), Tibor Zingora (Czech Academy of Sciences), Philipp Jugert (University of Duisburg-Essen)
3.Multidimensional diversity within classrooms and educational inequality: Segregation of helping networks among peers as a mechanism
Chenru Hou (University of Potsdam; Humboldt-University Berlin), Georg Lorenz (University of Potsdam; University Leipzig), Camilla Rjosk (University of Potsdam)
- xiii (原文：Teachers influence social interactions between students through their own teacher-student interactions. Popularity among peers depends in part on positive T-S relationship.)
- xiv <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA225M80S4A720C200000/> (2024/7/25 11時閲覧)

xv Ibnモスクのオブジェは正面左側から見ると「白色」に見え、正面右側から見ると「濃紺色」に見える。同一のオブジェであるが、オブジェを見る視点によって、見え方が異なる。このオブジェは礼拝する際の正面に位置しており、多様性というIbnモスクの理念を表している。

謝辞

本原稿の査読をしてくださった先生方、ならびに

東京未来大学紀要委員会の先生方に心より感謝を申し上げます。

なお、本研究はJSPS 科研費22K02016「研究課題：日本におけるマイノリティ集団間の複合と相克に関する当事者団体からの聞き取り研究（研究代表者：白石雅紀）」の助成を受けたものです。

(しらいし まさのり・とだ ゆういち)

【受理日 2024年11月20日】